

当院の準無菌室内における感染予防行動と意識の実態調査

東病棟 6 階 ○伊藤 千春 橋本文 中嶋 由紀子 角野 一枝
村田 紋子 小寺 恵美 川尻 征子

Key word 看護 準無菌室 感染予防行動 セルフケア
はじめに

造血細胞移植や化学療法による免疫不全状態の患者は、感染症に罹患すれば死に至ることもあり、患者の身体的・精神的苦痛は計り知れない。感染予防は医療者側だけで行うには限界があり、患者や家族の感染予防行動に対するセルフケア能力の向上が重要となってくる。

現在、当病棟では、準無菌室に入室することが決定すると、受け持ち看護師が感染予防の指導を行っている。しかし、指導後にも患者や家族からの感染予防に関する質問が多く、不安や疑問を抱えているのではないかと感じるがあった。これまで患者の感染予防行動とそれに対する意識についての報告は少なく、当病棟でもそれらを調査するまでには至らなかった。今後、より効果的な感染予防の指導を行う上で、これらのことを把握する必要があるのではないかと考えた。

以上のことから、準無菌室に入室していた患者とその家族に対する感染予防の指導の有無、実際の行動、それに対する意識について調査したのでここに報告する。

I. 用語の定義

準無菌室：水平層流方式、NASA 基準クラス 100 の造血細胞移植時や骨髄抑制の強い時に使用している病室。

II. 研究方法

1. 対象：2003 年 4 月～2005 年 8 月に当病棟の準無菌室で造血細胞移植または化学療法を受けた血液疾患患者 26 名とその家族 26 名。
2. 調査期間：2005 年 8 月 15 日～8 月 31 日
3. 調査方法：準無菌室で治療を受けた患者に対し、「含嗽」「手洗い」「保清」「肛門洗浄」に関する指導の有無、実際の行動、その理由や意識、体調不良時の行動の変化について、また家族に対し、「手洗い」

「マスク着用」「透明カーテンの使用」に関する指導の有無、実際の行動、その理由や意識について独自で作成した選択式の質問紙を用いた実態調査研究。入院中の 9 名には手渡し、外来通院中の 18 名には郵送した。

4. 分析方法：質問紙調査から得られた結果を記述統計し、内容を検討した。

5. 倫理的配慮：患者、家族ともに研究の主旨、参加の自由、個人が特定されないこと、アンケート結果は研究以外で使用されないこと等を含めた研究依頼書を用いて説明し同意書にて同意を得た。

III. 結果

1. 対象は患者が男性 9 名、女性 7 名の計 16 名で年齢は 26～68 歳、家族が男性 6 名、女性 7 名の計 13 名で年齢は 37～62 歳であった。回収率は、患者が 61.5%、家族が 50%であった。

2. アンケートを集計し、患者からは 1)～4)、家族からは 5)の結果が得られた。

1)～3)の結果は(表 1)、4)は(図 1)に示す。

1) 感染予防の指導を受けたと答えたのは、対象患者 16 名中「含嗽」16 名、「手洗い」12 名、「保清」11 名、「肛門洗浄」11 名であった。

2) 感染予防行動を当然と思っていたのは、「含嗽」11 名、「手洗い」13 名、「保清」9 名、「肛門洗浄」14 名であった。

3) 感染予防行動を実施していた時(複数回答)は、「含嗽」が毎食前 4 名、毎食後 10 名、眠前 7 名、ベッドから立った時 4 名、トイレの後 3 名、室外から戻った時 11 名、口の中が汚れた時 6 名、気が向いた時 1 名、「手洗い」が毎食前 9 名、毎食後 4 名、眠前 2 名、ベッドから立った時 4 名、トイレの後 11 名、室外から戻った時 13 名、手が汚れた時 7 名、床・壁・ベッド柵に触った時 6 名、気が向いた時 2 名、「保清」が毎日 2 名、体調の良い時 10 名、汗をかいた時 6 名、時間がある時 2 名、医療者から促された時 2 名、家

族に促された時1名、気が向いた時3名、「肛門洗浄」が排便後16名、排泄（排尿・排便）後6名であった。

4) 体調不良時の感染予防行動は、「含嗽」10名、「手洗い」13名、「保清」10名、「肛門洗浄」7名に回数の減少があった。また、その行動に対して仕方がない、余裕がない、面倒、嫌だというような意識の変化があった。

5) 感染予防の指導を受けたと答えた家族は、13名中「手洗い」9名、「マスク着用」11名、「透明カーテンの使用」8名であった。感染予防行動を当然と考えていたのは、「手洗い」「マスク着用」とともに12名であった。実際には「手洗い」11名、「マスク着用」12名、「透明カーテンの使用」は10名が行っていた。

IV. 考察

1. 患者の感染予防の指導について

当病棟では、感染予防のパンフレットを用いて「含嗽」「手洗い」「保清」「肛門洗浄」などの指導を行っている。しかし、実際に指導を受けたと答えたのは、対象患者16名中「含嗽」16名、「手洗い」12名、「保清」「肛門洗浄」各11名と差がみられた。このようなばらつきがあるのは、指導時期、時間、回数など患者個々のニーズに合った指導が出来ていなかったのではないかと考えられる。沼は、患者個々により感染予防に関する知識や実践方法が異なるため、患者の認識を知り、その上で予防行動をどのように行っているのかを確認しながら進めていく¹⁾と述べている。患者の感染予防に対する理解を深めるためには、どのような指導が必要であるか個々についてアセスメントした上で、有効な関わり方を考えていくことが必要である。

また、対象患者全員が「含嗽」指導を受けたと認識していた理由には、口内炎が進み、びらんや潰瘍を起こすと口腔ケアが困難になり、口腔内の清潔は保てなくなる。このことは口内細菌の増殖につながり、二次感染を引き起こす可能性がある。そのため看護師が検温時に口腔内を観察し、訪室の度に含嗽の実施状況を確認し促す機会が多かったためではないかと考えられる。感染予防の指導は一度だけではなく、患者の状況に応じて繰り返し行う必要がある。

2. 患者の感染予防行動と意識との関係

「含嗽」は口腔粘膜の湿潤と水流による細菌の除去、ブラッシングは歯垢の除去のために必要なケアである。「含嗽」は毎食前・外出後、ブラッシングは毎食後に行うことが望ましいとされている。しかし、毎食前に含嗽を行っていたのは4名、帰室後は11名であった。これは、毎食前の含嗽の指導は初回のみが多いためと考えられる。ブラッシングの実施状況も調査した所、対象患者16名中10名が1日3回以上行っていた。これは、入院前からの習慣や口腔内をすっきりさせるためであったと考えられる。

「手洗い」は感染予防の基本として重要なポイントである¹⁾と述べられており、毎食前・排泄後・帰室後に実施することが望ましいとされている。対象患者全員が必要性を理解し、当然・仕方がないと思っていたにも関わらず、いずれの時も行っていたのは全員ではなかった。これは、手の汚れが目に見えず実感しにくいためと考えられる。

皮膚の表面に付着している常在菌を減らすためには、毎日のシャワー浴や入浴、更衣をして皮膚を清潔に保つことが望ましい。入浴が不可能な場合は毎日清拭や更衣を行うことが大切である。しかし、「保清」の必要性を11名が理解し、9名が当然と思っていたにも関わらず、実際に毎日行っていたのは2名であった。これも手洗いと同様に、発汗等がなければ自分の皮膚表面の汚れを実感しにくいためと考えられる。

「肛門洗浄」については、指導されたと理解している人数に比べ、意識も高く、対象患者全員が排便後に肛門洗浄を行っているという結果が得られた。これは、日常生活の中にウォシュレットが普及しており普段から習慣化されていたことや、頻回な下痢により肛門粘膜が傷害されると、感染源になる可能性があり、下痢が始まると肛門部の観察やケアの介入が多くなったためと考えられる。

以上から感染予防は、患者が必要性を理解して継続的に行うことが必要である。菅野は、治療前に感染予防の指導を行っても、患者は疾患に対する不安と治療への不安によって精神的な動揺が大きく、効果的でないことがある²⁾と述べている。患者の状態

からその人に合ったケア方法を選択し、感染予防の指導も一度で終わるのではなく、状況に応じて繰り返し行う必要がある。

3. 体調不良時の感染予防行動の変化

黒田らは、感染予防行動の遂行状況の差は身体症状の種類が多さに起因しているのではないかと述べている。今回の調査からも体調不良時には、感染予防の実施回数が減少するという結果がみられた。移植前処置や化学療法の副作用による身体症状があると精神的苦痛も強い。この時の看護師の関わりは非常に大切である。患者の苦痛を十分に理解した上で、再度感染予防の必要性の説明を行い、苦痛の軽減方法を一緒に考え、患者が頑張っていることを認め、励まし動機づけていくことが必要である。そうすることで、患者の感染予防行動が確立し、セルフケア能力の向上に結びつくのではないかと考えられる。

4. 家族の感染予防行動について

感染予防の指導を受けたと答えたのは、「手洗い」9名、「マスク着用」11名、「透明カーテンの使用」8名であった。実施していたのは「手洗い」11名、「マスク着用」12名、「透明カーテンの使用」10名と指導を受けたと理解していた人数よりも多く、意識も高いという結果が得られた。沼は、苦痛の強い時期の患者に対して何かしてあげたいと思うのが、家族の気持ちだろう¹⁾と述べている。家族は患者を心配する思いから、感染予防行動を実施していたのではないかと考えられる。

鈴木は、家族は本来互いに助け合うことによって、家族としての安定を保とうとする性質があり、家族の協力によって患者の感染予防行動を高めることが出来る⁴⁾と述べている。そのため患者同様、家族にも積極的に関わり、指導を行っていくことが必要である。

V. 結論

1. 「含嗽」「手洗い」「保清」「肛門洗浄」の指導を受けたと理解している人数に差が見られた。
2. 「手洗い」は対象患者全員が当然・仕方がないと思っていたが、毎食前・排泄後・帰宅後のいずれの時も実施できていたのは全員ではなかった。

3. 排便後には、全員が「肛門洗浄」を実施できていた。

4. 体調不良時には、感染予防行動の実施回数が減少した。

5. 家族の感染予防行動に対する必要性の理解、意識はともに高く、実施人数も多かった。

VI. 研究の限界

今回の対象期間は2年4ヶ月と長期に渡っている。人間の記憶は時間とともに薄れていくものであり、対象者の記憶にも差があることがこの研究の限界である。

引用文献

- 1) 沼直美:造血幹細胞移植患者の感染対策とセルフマネジメント, 看護技術, 48(11), 54-64, 2002
- 2) 菅野かおり:口内炎のセルフケア支援, 看護学雑誌, 67(11), 1066-1071, 2003
- 3) 黒田政美 他:骨髄移植を受ける患者の無菌室における身体症状と感染予防行動遂行との関連, 日本看護研究学会雑誌, 24(3), 367, 2001
- 4) 鈴木和子・渡辺裕子編:事例に学ぶ 家族看護学—家族看護過程の展開—, 6, 廣川書店, 1999

参考文献

- 1) 造血細胞移植ガイドライン—移植後早期の感染管理, 日本造血細胞移植学会, 2000
- 2) 石岡明子:感染予防のセルフケア支援, 看護学雑誌, 67(11), 1072-1076, 2003
- 3) 遠藤久美:がん化学療法の看護⑤骨髄機能抑制, 月刊ナーシング, 23(9), 60-63, 2003
- 4) 竹内麻紀子・河野保子:化学療法を受けるがん患者の生活実態とセルフケア行動, 看護学雑誌, 67(11), 1132-1137, 2003
- 5) 松前佐代子 他:血管疾患で化学療法を受ける患者の口腔内保清に対する指導—ブラッシングに着目して—, 大阪大学看護学雑誌, 9(1), 53-56, 2003
- 6) 尾上裕子:がん化学療法時の口腔ケアはこう勧める, Expert Nurse, 19(3), 112-121, 2003
- 7) 駒香代子 他:血管疾患患者の家族が看護師に望むケア, 第35回日本看護学会論文集成人看護I, 89-91, 2004

(表1)患者の行動の指導・理由・意識・体調不良時の結果

含嗽	指導	意識	体調不良時の行動	体調不良時の意識
①	あり	仕方がない	普段通り	仕方がない
②	あり	当然	普段通り	当然
③	あり	当然	回数減少	面倒・余裕がない
④	あり	当然	回数減少・ベッドサイド	仕方がない
⑤	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑥	あり	仕方がない	回数減少	仕方がない
⑦	あり	仕方がない	—	当然
⑧	あり	当然	普段通り・ベッドサイド	当然
⑨	あり	仕方がない	回数減少	仕方がない
⑩	あり	当然	回数減少・ベッドサイド	当然・余裕がない
⑪	あり	仕方がない	回数減少	仕方がない
⑫	あり	当然	回数減少・ベッドサイド	仕方がない・辛い
⑬	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑭	あり	当然	していなかった	余裕がない
⑮	あり	当然	ベッドサイド	—
⑯	あり	当然	回数減少	仕方がない

手洗い	指導	意識	体調不良時の行動	体調不良時の意識
①	あり	仕方がない	普段通り・ウェットティッシュ使用	仕方がない
②	あり	当然	普段通り	当然
③	あり	当然	回数減少	当然・面倒
④	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑤	—	当然	回数減少	—
⑥	あり	当然	回数減少	当然
⑦	あり	当然	回数減少	当然・仕方がない
⑧	あり	当然	回数減少・ウェットティッシュ使用	当然
⑨	あり	仕方がない	回数減少・ウェットティッシュ使用	仕方がない
⑩	—	当然	回数減少	仕方がない
⑪	あり	仕方がない	回数減少	仕方がない
⑫	—	当然	回数減少	仕方がない・嫌
⑬	あり	当然	回数減少	当然
⑭	あり	当然	回数減少・ウェットティッシュ使用	余裕がない
⑮	あり	当然	—	—
⑯	—	当然	回数減少	仕方がない

保清	指導	意識	体調不良時の行動	体調不良時の意識
①	あり	当然	回数減少	仕方がない
②	あり	当然	回数減少	当然
③	あり	当然・気分転換	回数減少	当然
④	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑤	—	—	していなかった	—
⑥	—	仕方がない	していなかった	面倒
⑦	あり	仕方がない	回数減少	当然・仕方がない
⑧	あり	気持ちよい	普段通り	仕方がない
⑨	あり	仕方がない	回数減少	仕方がない
⑩	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑪	あり	当然	回数減少	当然
⑫	なし	気分転換	促された時行った	嫌・余裕がない
⑬	—	—	—	—
⑭	あり	当然	回数減少	余裕がない
⑮	あり	当然	していなかった	余裕がない
⑯	—	当然	回数減少	余裕がない

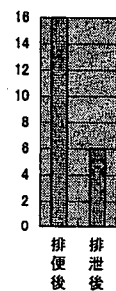
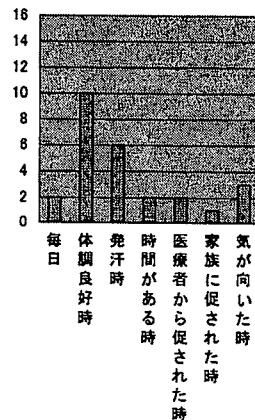
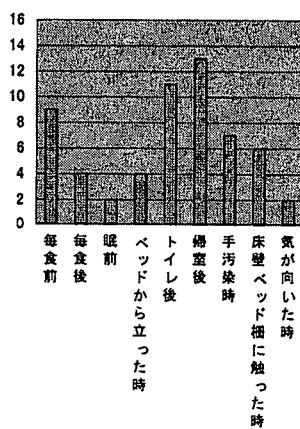
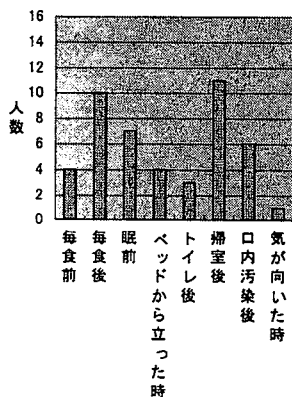
肛門洗浄	指導	意識	体調不良時の行動	体調不良時の意識
①	あり	当然	普段通り	仕方がない
②	あり	当然	普段通り	当然
③	あり	当然	普段通り	当然
④	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑤	—	当然	回数減少	当然
⑥	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑦	なし	当然	普段通り	仕方がない
⑧	あり	当然	普段通り	当然
⑨	あり	仕方がない	普段通り	仕方がない
⑩	あり	当然	普段通り	当然
⑪	あり	当然	回数減少	仕方がない
⑫	あり	仕方がない	回数減少	仕方がない
⑬	—	当然	回数減少	—
⑭	なし	当然	回数減少	嫌・余裕がない
⑮	あり	当然	普段通り	当然
⑯	—	当然	普段通り	当然

含嗽

手洗い

保清

肛門洗浄



(図1)感染予防行動を実施していた時